

太平洋戦争と北米伝道 ①

おやさと研究所研究員
尾上 貴行 Takayuki Onoue

これまでアメリカ本土、ハワイ、カナダにおける戦前の天理教伝道についてみてきた。その活動は各地の日系移民社会を基盤として展開・発展したが、いずれも 1941 年の日米開戦によって伝道の中止を余儀なくされただけでなく、日系移民社会そのものが崩壊するような事態に陥った。アメリカでは戦時中、日系移民社会の指導者たちは逮捕・抑留され、また主にアメリカ本土西海岸に在住する日系人（日本人国籍の一世とアメリカ国籍の二世を含む）は強制的に居住地から排除され、収容所に入れられた。天理教の教会長や信者たちも、これら多くの同胞とともに屈辱と苦難の生活を強いられた。本号ではまずアメリカ本土での様子を見ていく。

「逮捕・抑留」政策

1930 年代になり日本の東アジア進出が強まると、アメリカ国内では日本への不信感が高まり、また西海岸では日系人たちの経済的成功が反日感情をかきたてていた。連邦政府の各情報局は、日本と開戦した場合に国家の安全を脅かす危険性のある在住外国人たちについての情報を収集し、開戦までにリストを作成していた。その際、ドイツ人とイタリア人に関しては特定の人物だけを調査しただけであったが、人種的な偏見から日系人は全員危険性があるとして、一世のみならず二世に関する調査も行っていた。また一世は「危険度」によって、日本を支援している団体の指導者たち、日系団体への寄付者、日本語学校教師などに区分されていた。

1941 年 12 月 7 日に日本軍によって真珠湾が攻撃されると、すでに作成されていたリストにより、即日日系移民社会の指導者的立場にあった一世たちの逮捕が開始され、数週間のうちにその数は 2,000 人以上に及んだ。連行されたのは、会社経営者、新聞編集者、日本語教師、宗教教団の指導者などであった。彼らは逮捕され事情聴取を受けた後、釈放されるか、あるいは敵国の外国人として「抑留所」に収容されることとなった。この抑留所は連邦政府司法省や陸軍によって運営された。

太平洋戦争が終わるまでに、アメリカ本土、ハワイ、アラスカ準州、マーシャル群島に在住していたドイツ人 7,449 人、イタリア人 2,442 人、日本人 15,213 人が逮捕・抑留され、ラテンアメリカ諸国に在住していた日本人 2,264 人も連行され、アメリカで抑留された（山倉、88 頁）。抑留者の多くは数年にわたり家族と隔離・抑留され、終戦後 1 年以上も継続して留められていた人もいた。その家族たち自身も収容所で生活を送っていたため、家族関係に支障をきたしたことも少なくなかった。

「強制排除・収容」政策

一方、開戦と同時に日系人が在住する地域では規制が敷かれ、当局による家宅捜索、財産没収が行われたり、夜間外出禁止令が出されるなどした。また現地メディアによって、アメリカ西海岸では日系人たちが大日本帝国の手先として日本軍を手助けしているとの報道もなされた。1942 年 2 月 19 日にルーズベルト大統領によって発令された大統領令 9066 号により、主に西海岸に軍事排除地域が指定され、その地域において国防上危険とみなされた人物の立ち退きを強要できる権限が陸軍に与えられた。発令の背景には陸軍と西海岸の政治家たちからの大きな圧力があつたとされる。しかしドイツ人やイタリア人には適用されず、またハワイに在住する 15 万 8 千人の日系人のほとんどが立ち退きを命ぜられなかった。

この告知は西海岸のカリフォルニア、オレゴン、ワシントン

などの州で掲示され、一世だけでなくアメリカ国籍を有する二世も含め日本人の血を引くものはすべて、住居を明け渡して指定された「集合センター」へ向かうように命じられた。準備に与えられたのは約 1 週間であり、持参を許されたのは手に持てる所持品だけだったため、多くの人々は農場や会社などの事業、そして土地や財産を失った。こうして 1942 年 3 月以降、日系人たちは武装した兵士に監視されながら、居住地からの立ち退きを余儀なくされることとなった。集合センターは空き地や競馬場などに急遽設置された仮施設であり劣悪な環境であった。そして数カ月後に、内陸の人里離れた「転住所」と呼ばれる強制収容所に移された。この転住所は大統領府直属の非軍事機関であった戦時転住局によって運営された。

こうして 1942 年から 1946 年までの間、10 カ所の強制収容所で 12 万人の日系人が収容生活を送ることとなった。この収容所はアメリカ西部と中部の砂漠や沼地といった過酷な環境に設置された。各収容所では自治会が組織され、それぞれに所内の農場、調理場、学校、病院、新聞出版社などで就労した。各家族は粗末なバラック小屋に住み、混在した食堂で食事をとり、トイレとシャワーは共同であった。居住環境は徐々に改善され、物質面では最低限の生活を送ることができたが、罪なく居住地を追われ強制収容所に留められていることによる精神的な苦痛や、将来への不安などによる心理的なダメージは甚大なものであった。また国家への忠誠心を問う忠誠登録により、家族内や世代間での亀裂も生じた。

収容所からの解放と再定住

連邦政府は、収容所開設直後からアメリカに忠誠があると見なされた日系人を解放し軍事隔離地区から離れた地域に定住させるという方針をとった。人道主義者やキリスト教団体などのサポートにより、二世の大学生を収容所から解放して復学させる活動も行われた。また二世にとってはアメリカ軍への入隊も収容所から出る一つの方法であった。日系兵士で編成された第 442 連隊戦闘団は、イタリアとフランスでの激戦で活躍した。通訳部門で活躍する二世男女もいた。彼らはアメリカのために命を捧げることで、忠実なアメリカ市民としての忠誠心を示し、のちの日系人イメージ向上に大きな影響を与えることになった。

戦争が終結し収容所が閉鎖されると、多くの人たちは西海岸の各地へ戻った。しかし、築き上げてきた日系人街や農場などは消滅しており、厳しい現実にとらされた。また反日感情の強い西海岸での再建を断念し、中西部や東部へ移住する人々もいた。反日感情が厳しく人種的差別を受けた人もいれば、比較的容易に受け入れられた人など様々であったが、見慣れぬ土地での新しい出発は容易ではなかった。

こうして日米開戦と同時に始まった逮捕・抑留と強制排除・収容政策により、戦前の日系移民社会は崩壊し、日系人たちは戦時中に抑留所や収容所で苦難の日々を送った。そして戦後に再生された日系社会では徐々に一世から二世へと指導的立場が移行され、日系人たちはアメリカ社会での新たな道を歩みだすこととなった。

【参考文献】

- ・Densho「日系アメリカ人」、<http://nikkeijin.densho.org/legacy/index.htm>。
- ・山倉明弘『市民的自由：アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』彩流社、2011 年。